闇に葬られた蝶騎士となりて

Kurokodai

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪……それは大昔から居たと恐れられていた存在

しかし、現代になって人々の目には妖怪が見えなくなり、妖怪はいないという事になってしまった

そんな中、元人間（？）が闇に葬られた蝶となり、妖怪の世界に入り込んでいく

目次

プロローグ ―――――― 1
妖怪が目覚めた日
第一話　渋谷赤木化事件 ―――― 6
第二話　妖怪ポストへ…そして
11

プロローグ

蝶……別名「夢見鳥」。
それは昆虫の中でも、様々な模様や美しさを持った生き物。
今の時代では、蝶は卵から生まれ、幼虫から蛹へ……。
そして今、我々が見ている色鮮やかな美しい蝶へとなっていく。

しかし、昔の時代ではそんな美しい蝶は、とても不吉な存在と言われていた。
平安時代では、蝶は死者の魂が浮世に蘇った姿と言われていた。
そう言った記述が今も残っている為、現在様々な作品では『妖怪』の一種として、様々なキャラが作られてきた。
こうして、蝶は美しき存在、又は怪しい存在として多くの人に愛されてきた。

しかし、その中の一つ、世に出ることができなかった存在が一人いた。

……それが、極蝶の騎士であった。

――――――――――――――――――――――――――――

「んっ……もう朝か……」
とある部屋で目覚めた一人の人間。
ここで暮らし始めて、もう3年、去年までは大学に通っていたが、今は卒業し「フリーター」として自由気ままに生活をしている。
昨日は妙に体が痛かったが、もうその痛みは引いていたみたいだ。
今日もいつもの様に、朝の伸びをし、残っている眠気を吹き飛ばそうとする。
すると、青年はあることに気づく。
「……あれ、おかしいなぁ。何か、指が無い様な気がする。ん？」
言いながら、自分の手を見つめた
すると、肌色で五つあるはずの指はなくなっており、代わりにあったのは―――白い

グローブの様な手であった。

「……」

青年は次に自分の体を見てみた。

体は、すらりとした身体から真ん丸の身体になっており、足も五本の指が無くなっていた。

え？もしかして肥ったのか俺。

そして背中が何やら違和感を感じた。

そこで身体を起こし、全身鏡で自分の後ろ姿を見ようとした。

そして、鏡に映った自分を見つめた。

背中には、真紅に染まった羽があった。

いや、羽と言っても鳥の羽ではなく、昆虫ーーーと言うより蝶の羽が背中と接続されていた。

まぁ、まだそれはいい……それはまだいい

問題なのは、自分の体が、長身だった八頭身の身体から、先程見た真ん丸の姿をした一頭身の身体であった。

他にも、顔が体にあり、その顔には羽と同じ真紅の仮面をつけていた。

どう見ても変人（？）です。本当にありがとうございました。

えっ？どういうことなの？

まさか俺って、人間と見せかけて実はＵＭＡ（未確認生命体）だったのか？

いやいやいや！ちゃんと考えろ、俺が生まれたのは横浜の産婦人科だった。３２０３ｇの元気な赤ん坊で…

？「（誰が生い立ちから話せっつったよ！）」

青年「うわっ！だっ誰だよ!?」

突如、謎の声が青年の頭から響いてきた。

？「（あ……すまなかった。あー、おほん単刀直入に言おう。君のその姿は私の体だ。）」

青年「ほぇ？」

？「（だが安心したまえ、別に元の体に戻れないという訳ではない。その姿で自分がなりたい姿を思い浮かべれば、その思い浮かんだ姿になれることができる。自分の本来の姿でも、自分が求める姿でもいい。）」

青年「いや、ちょ」

？「（その代わりお前にお願いがある。私の姿で、この世界の秩序を守っていってほし

い。頼んだぞ。」）

青年「いやいや！その前にお前の名前は!?」

？「（私か……私の名前は――）」

その謎の声が終えた後に俺は、新たな日常が始まった。

目に見えない悪の存在と人間の闇を払うために…

ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ

妖怪が目覚めた日
第一話　渋谷赤木化事件

ここは渋谷のスクランブル交差点付近にあるビルの屋上。
いつもの様に多くの人で混み合っていた。
天気は何か不吉な事が起きそうなぐらい曇っていた。
そんな中、青年は車が行き交うスクランブル交差点の様子を見ながら、ため息をついていた。
青年「(はぁ～…まさか俺がこんなUMA(未確認生命体)になってしまうとは…)」
あの後、青年は声の言われた通りに、自分の本来の姿を思い浮かんで見た所、自分の本来の姿に戻れたようだ。
背中の羽以外は
その時の青年は信じたくない現実に、泣きそうだった。
だが、一度決心がついたのかその状態で外に出てみた所、何故か人々は背中の羽に気

づかなかった。
青年は最初人々からは自分が見えて居ないのでは!と思っていたが、バイト先のコンビニにいった所、普段通りにバイト仲間と話ができたし、バイトにも普通に参加できて、通常の生活では何の支障は出ていないようだ。
ただ、今の青年はある事に疑問を抱いていた。
『(私の姿で、この世界の秩序を守っていってほしい。)』
この言葉には、俺は未だに理解できていない。
確かに、あの朝になっていたあの姿の時に、この身体での戦い方が頭の中で浮かんできた。
ただ、それでどうすればいいのか?
第一、こんな平和な世の中で、秩序が乱れる様なことがあるのだろうか?
なんて思っていた青年だったが、スクランブル交差点の方に目をやると、その真ん中で自撮り棒を持って立ち止まっている一人の男がいた。
男「おハロハロ〜。チャラトミチャンネル、チャラトミで〜す。」
何だあいつ、唯のチャラ男(馬鹿)か。そんなことをして何の意味があるって言うんだ。
なんて思っていたが、スクランブルの歩行信号が赤になってもあの男はずっと止まったままだ。

その間に停車していた車が発車し始めた。
おい！まさか!!
キキッー！
ブーッ！
男「フゥー！チャンネル登録お願いしま～す」
キュルルッ！

うわっ!!あいつ、迷惑行為を行うＹ●ｕＴ●ｂｅｒじゃないか!!
何て下らねぇことをやっているだよ!!あんなの動画が炎上するだけだよ!!

「危ねぇだろ！何やってんだよ　おい！」
「バカ野郎！こっちは急いでんだ！」
「ふざけんな！」
男「お前ら脇役、俺　主役～！　フッフウ～！」
あ、しかもこいつ自分以外を見下すタイプ的なやつだわ。
周りから罵倒が来ても全然反省もしていないし、あ……もしかしてああいう奴を消し去る為に俺がこの世界を守るのか？

なんて冗談言っていた青年だったが、その男から何やら黒い靄の様なものが出ているのが見えた。

青年「ん？あれは一体……っ！」

突如、青年が男を見て驚愕をした。

見てみると、男は突如苦しみだしたかと思うと一瞬で巨大な赤い木に変わってしまった。

青年の目に非日常的な展開が起きてしまった為、驚愕していたのだ

青年「はぁ!?何だよあれ!?どうして人間が木になってしまうんだよ!!」

だが、木の周りにいる人たちは驚きの表情を見せずに、何故か写真を撮るという不明な行為をし始めた。

青年「（え？何でみんな写真を撮っているんだ？……え!?まさか!?）」

青年はポケットに入っていたスマホを取り出し、動画サイト『ニ●ニ●動画』を立ち上げてみると、その光景に唖然してしまった。

その内容は、人が木になったにも関わらず『渋谷に巨大な木が出現ｗｗ』と言ったタイトルで、流れてくるコメントも『何それウケるｗｗｗ』『やばい、腹筋崩壊したｗｗｗ

ｗ』『ｗｗｗｗ』等の正気の沙汰ではないコメントで溢れていた。
さらに渋谷にいる人を見てみると、あの男と同じく黒い靄の様なものが体から出ていた。
青年「(これは……人間の闇(本性)と言うやつか?…めっちゃ怖えな（汗))」
すると、その写真を撮っていた人々も次々に赤い木になっていった。
ここからでも、木になっていく人々の悲鳴や叫びが聞こえてくる。
そのまま赤い木は重なり、まるで大木の様な感じになってしまった。
青年「どうなっているんだ……人が木になるなんて普通ではありえない筈だ?」
すると、木のある位置の上空で、空間が歪んだ様な感じで何かがいた。
その何かは空で止まっていたが、しばらくするとその何かは地面の方へと向かっていき、そのまますり抜けていった。
青年「なんだ?人が木になったのと関係があるのか?」
そう思った青年は、背中の羽を展開してこの事件の解決に向かおうとした。
Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ

第二話　妖怪ポストへ…そして

渋谷の赤い木の騒動から数日が経ったある日
この事件は、あらゆるチャンネルのニュースでの話題になっていた。
今でも、木になった原因は明らかにはなっておりません。
一部の研究者からは「科学兵器の可能性」など、「宇宙人の仕業」など、「有害物質による遺伝子異常」など、「ゴルゴムの仕業!」などの説が浮上していた。
しかし、それらの説が本当に正しいのかは未だにわかっていません。

そんな中、一人の少年がこの事件の事をある存在のせいと言っていた。
眼鏡の少年「違うよ! 妖怪のせいだって!」
同い年の少年「渋谷の森が妖怪のせいなんて嘘つくなよ」
中学生の少年「妖怪なんているわけないだろ」
渋谷の事件の仕業を妖怪のせいという眼鏡をかけた少年。
その近くにいる眼鏡をかけた少年と同い年ぐらいの少年と中学生の少年の二人は妖怪の存在を否定していた。

その言葉により、眼鏡をかけた少年は泣き始めてしまった
眼鏡の少年「嘘じゃないもん」
すると、その後ろから新たな人物が声をかけて来た。
中学生の少女「そこの兄弟さん」
同い年の少年&中学生の少年「「えっ!?」」
中学生の少女「またいじめてるのかよ」
3人が後ろを見ると、中学生の少女がいた。
その姿を見た眼鏡の少年と同い年ぐらいの少年は…
同い年の少年「ヤッベ、デカまなだ!」
中学生の少年「あっ…」
その言葉を聞いた中学生の少年は困った様な表情をしていた。
対して少女は、とても不機嫌な表情で…
まな「呼び捨てにすんな!」ドカッ
チョップを何故か中学生の少年に当てた
同い年の少年「兄ちゃん!?」
中学生の少年「何で　俺が…」
まな「あと私はそんなにでかくない…なはず。」

この少女の名は、犬山まな。
付近の中学校に通う中学一年生。
行動力と頭の回転は速く、やや気が高いため少し暴力を振るうが、正義感がとても高い。
実は、眼鏡の少年…「裕太」とはお隣さんであった。
彼女が現れたのは、裕太がいじめられていたのを助けるためであった。
まなは裕太から祖父から聞いた「人を木に変える妖怪の話」を聞いて、さらに妖怪を退治してくれる人へ送る為のポスト、「妖怪ポスト」のことも聞いた。
だが、妖怪ポストの場所は誰も知らなかった。
まなは、妖怪ポストの場所を探ろうとサイトで聞いてみる事にして見た。
最初はまなでさえも無理と思っていたが、一人の人物がその場所を教えてくれた。

◇

サイトに示された場所に四人で行ってみると、そこには時代から忘れ去られたみたいに木造でできたポストがあった。
それこそ、まさしき妖怪ポストであった。

まなはすぐさま、紙とペンを取り出し、中学生の少年…「蒼馬」の背中の上で書いた。

チョップをしてから……

蒼馬「いや　だから　何で　俺が…（涙）」

まなは手紙を書き終え、その手紙をポストの中に入れた。

蒼馬「お前　呪われるぞーw」

まな「何だと!?」

その言葉を聞いたまなは、殴りに行こうとしたが、足元にあった瓶によって転びかけて、さらに手にかけたパイプがとれてしまい、まさかの偶然力でかなり汚れてしまった。

それでもなお、殴りに行こうとしたが、すでに蒼馬と裕太と同い年の少年「大翔」は逃げ出していた。

まな「あんにゃろ〜、どこ行った!?」

すると裕太は…

裕太「ありがとう　信じてくれて」

そういって、家へ帰ってしまった。

それを聞いたまなは…

まな「信じたわけじゃないんだよなぁ…」

という感想だった。
どうやら彼女も、妖怪を信じていない様だ。

◇

しばらくしたある日、また大翔が裕太をいじめたようで、その兄である蒼馬にまなは蹴りを入れながら道を歩いていた。
しばらくすると、照明が不気味に光り出し、どこからかカランコロンと下駄の音が聞こえて来た。
どうやら後ろから聞こえてくる様だ。
後ろを見ると……
誰もいなく、ため息をして前に向いた。

そこには、影で顔が見えないが不気味な少年が立っていた。
蒼馬「うわぁ～っ！」
蒼馬は突然の出来事に驚きながら、逃げて行った。
取り残されたまなは、目の前の少年に質問した。
まな「あ…あんた誰よ!?」
少年が歩き出すと、照明の明かりによってその姿が現れた。
まるで、昭和時代の子供の様な姿に、黒と黄の縞模様のちゃんちゃんこに、下駄を履いた少年であった。
そう、彼こそ裕太が言っていた「妖怪を退治してくれる人」ゲゲゲの鬼太郎。
？「ゲゲゲの鬼太郎だ。まみって君か？」
その名前を聞いたまなは、突如不機嫌な顔になり、きたろうの両方の頬を引っ張った。
まな「まなだよ！犬山まな！」
すると鬼太郎の髪の一部が揺れ始め、そこから目玉の小人（？）が現れた。
目玉の小人（？）「手紙をくれたのはお嬢さんかね？」
するとまなは、驚いの表情をして若干現実逃避をしていた。
そこで鬼太郎が説明し始めた。
この目玉の小人（？）は鬼太郎の父「目玉おやじ」というのであった。

少し落ち着いたところで、まなは鬼太郎たちにスマホにあった「赤い木」の画像を見せた。

目玉おやじが何故かスマホに興味が湧いてしまったが…

目玉おやじ「ここ…これは吸血木じゃ！」

まな「えっ？ドラキュラ？」

鬼太郎「そっちじゃない。樹木の方だ」

どうやらあの赤い木は「吸血木」という様だ。

おやじが言うには、人間の血を養分として育つ木との事だ。

それを聞いたまなは鬼太郎の腕を引っ張り、渋谷へと向かって行った。

そこで、あの赤い蝶の騎士もいる事はまなたちは知らなかった。

ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ